

# 点描ぐんま経済

日銀支店長

見聞録

■146■

春がすぐそこまで来ていることを肌で感じられる祭りを玉村町で見学した。

まず、上福島地区の「すみつけ祭」。起源は江戸中期で300年以上の歴史を誇る。疫病が流行した折、鍋を持ったまま転んで、その鍋墨が顔についた女性が病気にかからなかったという言い伝えになちなみ、顔に鍋墨を塗って無病息災を願う。大根になで付けた鍋墨を塗ってもらうと、ひんやりして意外と心地よい。赤ん坊が嫌がって大泣きしても笑いは絶えず、平和

## 玉村町の春祭り

そのものといった風景だった。

無病息災を願うこの祭りも、コロナ禍では中止を余儀なくされた。そう

# 予祝に込める思い

した苦役の判断も経て息づく祭りを見られてうれ

もうひとつは、樋越神明宮の「春鉦祭」。こちらも200年余の長い歴史を持つ。面白いのは、豊作を「予祝」する田遊びの神事だという点だ。

祈禱のあと、総代たちの前向きな動機付けをつ

が榊や榎の枝に餅を付けてくわに見立てたものを持って、拜殿の前で水田を作るしぐさを行う。監督役から「畔が曲がっている」「モグラ穴があつて水が漏れている」などと注文が付くとやり直し。監督役が了解すると、神主さんが掛け声を上げて一同が呼応する。これを

3度繰り返した後、くわモドキが放り投げられ観衆が取り合う。持ち帰れば、豊作や養蚕の当たりが約束されると信じられている。

予祝は、根拠のない樂觀ではなく、共同体の気持ちを一にして、勤労への前向きな動機付けをつ

くる。また、期待と異なる結果も、感謝で許容する。こうした社会的・心理的な仕掛けが、天候や水利が不安定だった群馬に根付いたのは納得がいく。

墨付けで顔を黒くして笑い合う前者も、けがれや厄を通過したことを前もって慶ぶ予祝であるという解釈も成り立つ。

予祝と似て異なるのが「予断」だ。予断があるという結果を確定的に捉え、

主体的な努力がそがれるほか、不確実性や意にそぐわない結果を拒絶しがちだ。また、結果に対する冷静な検証が生まれにくい。政策の立案・遂行においても、肝に銘ずるべきだと感じた。

玉村町は、かつて京都朝廷が日光東照宮に供物を奉るために派遣された例幣使が通った街道の宿場町。伊勢崎や太田など東毛に続く街道は、のちに生糸流通の基盤となった。今なお残る奇祭ともいえる前向きな営みが長く続くことを願う。

宮 将史(みや・まさひさ) 1974年生まれ。神奈川県出身。一橋大経済学修士。2000年日本銀行入行、政策委員会室国会渉外課長などを経て24年7月から現職



宮 将史(みや・まさひさ)

1974年生まれ。神奈川

県出身。一橋大経済学修士。

2000年日本銀行入行、政

策委員会室国会渉外課長など